

その時、わたしたちは

浪江町立請戸小学校 ○○○○

私たち請戸小職員が胸を張って言えることは、「子どもを命を守る事ができた」ということだ。平成二十三年三月十一日の地震発生時、私たちは、二年生以上の子どもたちと走って逃げた。車椅子の子は、担任がおぶって。誰一人けがもせず、あの海近くの学校から無事に逃げたのだ。そこには、幾つかの幸運な偶然があった。

その一つは、避難場所を目指しつつそこへ行かなかったことだ。私たちは、大きな揺れの後、「津波が来る。大平山へ避難。」という校長先生の指示で学校の西にある小高い山を目指して走った。そこは、請戸地区の人たちの津波の際の避難場所だ。しかし、そこへ避難する訓練をしたことはなかった。田のあぜ道を走っていると、車で迎えに来たお母さんたちがいた。子どもたちの走るのが速いこともあって、

「体育館で会いましょう。」

と言つて別れ、子どもを渡さなかった。私たちは南側の小道を山に入った。正しい登り口は北側の川沿いの道路にあるのだが、そこまでは距離もあるし時間もかかる。実際、北側から登った人は津波に追いかけられたという。私たちは、不安な思いを抱えなが

らも小鳥のさえずりや風の音を聞きながら津波が来ている事など知らずに逃げていた。一度も入ったことのない山道で子どもたちを誘導することができたのは、地域の方が一緒だったこととその山道を知っている子がいたからだ。

私たちは、山を越えて国道に出た。そこで初めて大変なことが起きていたことを実感した。広場で町のバスを待っていたのだが、道路は渋滞、迎えるバスはなかなか来ない。そこへ偶然一台の大型トラックが来た。運転手さんが、

「人命救助が先だ。乗せてやる。」

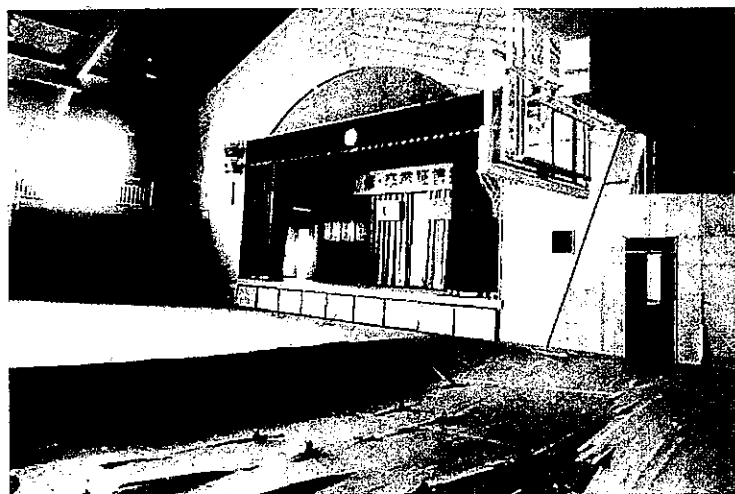
と言ってくれた。大人も子どもも百人位、荷台に乗せてもらって役場に着いた。助かった。まだ明るい午後四時半頃だった。役場には、請戸地区の人が大勢いた。子どもを一人ひとり確認して保護者に手渡した。

大平山に逃げた人たちが、体育館に入ってきたのは夜の九時過ぎだった。津波が押し寄せ、夜になって自衛隊に救助されたのだ。山の上からは、多くの家々が流れていくのも見えたそうだ。子どもたちに、そんな怖い様子を見せずに済んだこと、ジャンパーも着ないで逃げた子どもたちに寒い思いをさせずに済んだことを思うと、脇道に入つて良かったと思つた。

気がかりなのは、一年生のことだ。四校時で帰った子どもたちは逃げただろうか。児童クラブへ行った子たちの姿が見えず、連絡も取れない。無事でいてくれることを祈った。全員の無事が確認できたのは、四月になってからだ。津波によって、請戸地区は壊滅状態、学校も使えなくなった。たくさんの方が犠牲に

なった。そんな中で子どもたち全員が無事だったことは大きな喜びだった。

ところで、私たちは、避難所がどのようにして機能していくのか知っているだろうか。役場の人に案内されて体育館に入ると、ブルーシートが敷かれ名簿が張り出され、毛布が配られたりして、体育館が避難所になっていく様を見た。停電、断水の中、カセットトコンロを利用して炊き出しも行われた。多くの学校が災害時に避難所に指定されているが、私たちは学校が避難所になった時、どんな活動をすればよいのか考えているだろうか。これからは、教師全員が災害に対しての意識を持つて対応できるようにしておく必要があると思った。



津波被害を受けた体育館 (請戸小学校/2013年9月)

翌朝、自宅へ戻ろうとした時、原発事故による避難命令が出た。その時は、長期間帰れないとは思っていなかった。以来、私たちはバラバラになった。車もお金も携帯電話も持っていない。命があつて良かったと思つたが、身分を証明する物が何もないというのは極めてつらいものだった。あの日着ていたジャージ

と上履きで、ポケットにハンカチが一枚あるだけだった。全くの着の身着のまま。私たちより後から避難した校長先生のズボンの裾には津波の泥が付いたままだった。

私は、津島、福島、米沢を経て会津の実家に身を寄せた。三月中旬は、安全な所に避難しているようにとの連絡があつたからだ。テレビで避難所が映ると、知っている子はいないかと必死で見た。前の学校で教えた子が近くの体育館にいることを知り、会いに行つたが浪江から来たことを告げると、スクリーニングを受けたかその証明書を持っているか等と聞かれ、なかなか会わせてはもらえなかった。これが現実だ。何もする気になれず、県警のホームページを見て安否確認をしたり、延々とテレビの情報のテロップを見たりして過ごした。三月二十八日に郡山の免許センターが稼働して、車の免許証を手にした時、やっと社会に認められる立場になつたと思つた。

さて、バラバラになつた私たちを繋いだのは、携帯電話だった。ある日、若い先生が「浪江町伝言板」に「元気ですか？」と書き込みをした。すると、数人の保護者から返信メールが届いた。そこから、みんなの居場所が分かり名簿作成にも大いに役立った。私も新しいケータイを買い、クラスの子と連絡を取ることができた。ほとんどの子が県外へ避難したので、当分は会えないだろうと思つた。以前の私だったら、保護者にケータイの番号やアドレスを教える等あり得ない。しかし、今回は別だ。お母さんの相談に応じたり、近況を知らせてもらつたり...と、むしろ繋がりが深まつたと言える。住所録や連絡網の紙一枚さえ持たずに逃げた私たちが名簿を作るのは、至難の業だと思つたが、意外にも早くま

どめる事ができた。学校現場で、ケータイを所持することには賛否両論あるだろうが、私たちにとっては大切なツールである。

四月から浪江町の教員は、二本松市の旧木幡二小に勤務することになった。子どもはいない。先生だけがいる学校で、週に三日は学校へ二日はボランティアをする生活が始まった。学校では、安否確認と名簿作成、救援物資の整理をした。ボランティアは、同僚の先生と避難所巡りをした。福島市内の避難所に行くと、そこに浪江の人が居る。請戸の人に話を聞くと「九死に一生」の話ばかりで、胸が痛んだ。

子どもがどの学校に行くのかを聞いて、受け入れてもらう予定の学校にも行ってみた。福島市内の学校では、なぜ浪江の子が避難してくるのか情報がなかったらしく、私たちがお邪魔して話した事で、実情が分かってもらえた。年度末の仕事も終えないまま、新年度の準備、教科書も変わる年。ただでさえ忙しいはずなのに避難の子の受け入れの準備の仕事まで増えて、大変だっただろうと思う。手伝えないもどかしさを感じながら次々と届くランドセルや文房具の整理をした。改めて、全国からの善意を感じた。そして桜の季節。スーツ姿の親子の姿を見て、

「ああ、今日は入学式なんだねえ。」

「私たちは、何をしているんだろう。」

と、本来の活動ができない自分たちに気持ちが沈んだ。

五月からは、兼務辞令が出た。住まいも決まらなまま学校だけは決まった。子どもがいる学校に行けることは嬉しかったが、本校児童のいるところへという約束だったので、辞令の出ない先

生もいた。仲間とは複雑な思いで別れた。私は、会津若松市立鶴城小学校に配属された。請戸の子が四人もいる。子どもたちは、すっかり日常を取り戻していて元気そうだった。子どもが頑張っているのだから、私も頑張ろうと思った。会津の先生方に温かく迎え入れて頂いたことをありがたく思った。さらに、子どもたちや私たち兼務の教員を気遣って双葉地区の校長先生方が訪ねてくださったことも、とても励みになった。

子どもの笑顔が好きで教師の道を選んだ。まだ、困難は続くだろうが、離ればなれになった子も会津の子もみんなが笑顔になれるように、私なりにできることを精一杯したいと思う。

生かされた命を大切に、感謝の心を忘れずにいたい。